
ゼロのマリオくん

王い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロのマリオくん

【Nコード】

N3287U

【作者名】

王い

【あらすじ】

あの、スーパースターマリオと、ルイージ、ヨッシー、クッパが謎の鏡の中にあやまって入ってしまった！そこにいたのは、ルイズという少女がいた。マリオ達はどややって元の世界に戻るのだろうか？

プロローグ（前書き）

スーパーマリオくんのクロスやってみたかったW

プロローグ

ここはキノコ王国というキノコの人が住んでいるという。
そしてここにはスーパースターと呼ばれているマリオという親父がいた。

「誰が親父だ!」

あ・ごめんごめんw

「全くよく俺はスーパースターのマリオだぞ」

そういえばそうだったなw

「そういえばっておまえな・・・」

「マリオオーー!」

「マリオさーオーーん!」

「んその声は・・・」

そうその声の主は永遠の2番手ルイージと恐竜のヨッシーであった

「ヨッシー、ルイージ、どうした?」

「たいへんたいへんたいへんたいへんたいへん!」

「ルイージさんちよつと落ち着いてくださいよ」

「そうだな」

ルイージは餅をつきながらいった

「餅つくんじゃなくて落ち着くんだってば!」

「わかった(ズズズ)」

「落ち着きすぎだって!」

「それより大変なんだよ!」

「何だよ今度は・・・」

「キノコタウンの真ん中に謎の巨大な鏡が現れたんですよ!」

「何!それは本当か!すぐにいくぞ!」

マリオ達は急遽にキノコタウンに向けて走った

「うわぁ・・・」

そこにあっただのはマリオの高さの10倍ほどのでかさのある鏡があった

「・・・あ・俺この時間に塾があるんだった」

マリオはそう言い逃げた

そばにいた人はずっこけた

「逃げないでくださいー！ーい！」

「ぐわー！」

ヨッシーがドロップキックを炸裂した

「全く・・・しかしこの鏡・・・なんかどっかへの扉なのかもしれないな・・・」

「どっかへの扉？」

「そうだよ、ほらなんか聞こえねえか？」

「ん？ほんとだ、なんかの呪文を唱えているみえだ」

「もしかしたらキノコ王国を侵略するということかもしれないですね・・・」

「なにー！ー！ー！！！」

という声が上空から聞こえた

ピエロの顔のした円型の飛行船、したにはプロペラ、それに乗っていたのは、大魔王クッパであった

「クッパ！」

「ほかの侵略者だとうそんなことするやつはゆるさん！このキノコ王国を支配するのはこの俺様だ！いくぞマリオ！」

「へ？俺はいこうっていつててな・・・てぎゃあああああああ！」

「にいさーん！」

「マリオさーん！」

クッパとマリオは先に鏡に飛び込み消えてしまった
そのあとをルイージとヨッシーはマリオ達を追いかけて鏡の中に入っ
たのであった

プロローグ（後書き）

「よ！おれだマリオだ！」

「作者デース！」

「全くクツパのやつ、俺が行かないっていう前に俺を連れて行くとはな〜」

「ふふふ・・・逃げようだって無駄ですよ・・・だってあなたはこの小説の主役ですから・・・」

「おいおい・・・」

「ふふふ・・・ルイズはどんな反応するのかな〜」

「ルイズって何？」

「まあそれは次回」

「そうだなよし次回までまつか」

「次回・出会い・」

「「またみるよー！」」

召喚と出会いと大ボケと!?(前書き)

やっとできたお・・・つかれたお・・・

召喚と出会いと大ボケと!?

さゝマリオ達が鏡の中に入ってしまった
いったいどんな冒険が始まるんだろうか

「ゼロのマリオくん」

はっじまっるよ

「おいルイズ! できねえくせにまだやんのかよ!」

「早くしないと休み時間おわっちゃうよ!」

「うっさいわねえ今度こそできそうな気がするのよ!」

「何いってんだよ! おまえはゼロだからできっこねえよ!」

「みなさん! お静かに! もう一度だけチャンスを与えましょう」

ミスタ・コルベールはそういった

「はい」

ルイズも答えて召喚魔法を使った

「え？」

そこにいたのはマリオとクッパだった

「うーむ・・・ここはどこだ？」

「さーな、たぶんここがはあの鏡から通じた世界かもな」

「なに！ こうしちやおれんはやくこのせか・・・」「うわあああ
あああああああ」「へ？」

ずっっしいいいいいん

「「ぎゃあああああああああああああ」」

それからルイージとヨッシーも落ちてきた

「うーんここは？」

「それよりも・・・おなかすきました・・・お！ あそこに卵がありますね」

「何寝ぼけてんだよヨッシー」

「へ？ 何ですか？」

ヨッシーはミスタ・コルベールの方を見るとこういった

「いっただっきまー！ーす」

その瞬間ヨッシーは口から長い舌を使ってミスタ・コルベールをつかみ口へと運んだ

「のわああああー！ー！」

という断末魔か聞こえながらヨッシーのはらの中に

「こらー！ー！ー！ー！」

マリオはヨッシーにパンチした

「まったくおまえってやつはよお」

「すみませーん」

ヨッシーは涙目で謝った

「ちょ・ちよつとあんた達召喚したと思ったらなにしてんのよ！」
「ん？ あんただれだ？」

「あんた達こそだれよ！召喚したと思ったらミスタ・コルベールは変な生き物に食べられるわ、変な乗り物に乗っている亀的なやつはおるわ、しかも平民を二人召喚してしまうとは・・・はぁ」

「あゝあのさ、そのミスタ・なんちゃらっていうやつは大丈夫と思うぞ」

「へ？何を言ってる」

ぽこん

そう言っているあいだにヨッシーは卵を産んだ

その卵はすぐにヒビが入り

割れて出てきたのは・・・

「あれ？ここは？」

「ミスタ・コルベール！？大丈夫でしたか？」

「あ・ああ大丈夫ですよでももしかしこんなにいっぺんに召喚できるなんて思っていましたよ」

「た・たしかに・・・」

「あと契約はしましたか？」

「あ！忘れていました！」

「契約？なんじゃそりゃ？」

「ふん！感謝しなさいよね！平民のあんたにこんなこと、絶対に受けないんだからね！」

「へ？いったい何を・・・？」

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

五つの力に司るペンタゴン

この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

そういい、ルイズはマリオに唇を重ねた

「つてなにすんじゃーーーーー！！！！」

「契約よ契約、あんたみたいな平民には、ぜったいないんだからね！感謝しなさい」

「何やってるんですかマリオさん」

「マリオ？それがあんたの名前？」

「そうだよ・・・てあちちちちちちちちいいいい！！！！」

「それは、使い魔のルーンが刻まれたただだから気にしないで」

「気にするわー！ー！」

そうマリオが怒鳴った時

「あち！あちちちち！な・なんじゃー！ー！ー！」

「あついですゝゝゝゝゝゝ！」

「なんで俺だけ燃えるんだー！ー！ー！ー！」

ヨッシーとクッパとルイージも同じ仲間なのでルーンが刻まれた

「ふう・・・なんとか収まった・・・てなんじゃこりゃあああ！」

「変な形の紋章が手についてますよ」

「おい！貴様！わしらに何をした！」

「・・・おかしいわね・・・私、マリオにだけ契約をしたと思ったのに・・・」

「話を聞けー！ー！ー！」

「うるさいわねえこの亀！」

「なにゝわしは大魔王クッパ様だぞ！」

「何が大魔王よ！そんなのいるわけないじゃないの！」

「なにゝゝゝゝゝゝゝゝ！」

「おいクッパ・・・いくら怒りたいと思うのも山々なんだけど・・・周りをしろよ」

「へ？」

ざわ・・・ざわ・・・

「おい・・・ルイズが巨大な亀と緑の恐竜と赤緑のおっさん呼び出しだぞ・・・」

「うわぁ・・・幻覚だぁ幻覚を見てるんだぁ・・・」

と周りの人は、そう言いざわってた

「何だよおわしらそんなに珍しいか？」

「周りにだって火だるまのトカゲやドラゴンのほうが珍しいのに・・・どうゆうことですかねぇ？」

「おまえらの方が珍しいわい！」

マリオがつっこむとミスタ・コンベールはマリオ達のルーンを見た
「ふむ・・・なかなか珍しいルーンですね。少しスケッチさせてください」

「アラン？いいわよん？」

そこにいたのはセクシーポーズをしたマリオがいた
ドドドーーーー

その場にいた人は全員ずっこけた

「」「すなーーーーー！」「」「」

スパパパーーーーーー！

「のわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ルイズ達はマリオに突っ込みを与えた

「ま・まぁルーンはスケッチさせましたのでいいでしょう・・・」

「すみません・・・ミスタ・コンベール」

「いいですよ、とてもおもしろい使い魔ですね・・・」

「はは・・・」

「おいルイズは歩いてこいよ！」

「どうせ飛べもできないんだろw」

「ぐぬぬぬ・・・」

「何だよあいつらルイズの悪口言いながらいったぞ」

「全くだ」

「そういえばマリオさんはマントで飛べますよね」

「あ・そういえばそうだな」

「え！？あんた飛べるの！？」

「ああ、マントを使えば飛べるけどね」

「まさかあんたメイジなの！？」

「メイジ？何じゃそりゃ？」

「マリオさんあれですよ、お菓子のチョコレートで有名な・・・」

「そりゃ明治だろ！」

「いい？メイジってのはね、私のような魔法使いのことなのあんた達みたいな平民には勝てないのよ」

「なんだ魔法使いか」

「ふーん」

「え・・・何よ・・・もう早く来なさい！」

「わかったわかった」

「じゃお先ー」

「あ！クッパおまえずりーぞ！」

「あの巨体に乗ってもあの乗り物壊れないって・・・て・コラー私をおいていくなー！」

マリオ達の冒険は今始まったばかりであった・・・

召喚と出会いと大ボケと!? (後書き)

「マリオと」

「作者の」

「「次回予告!」」

「いやあゝまさかおれが召喚されてたとは・・・」

「まあいつものとうりボケまくってればいいと思うよW」

「だまらっしゃい!」

「よし今回は『大ボケのお仕事』です」

「使い魔ってどんな仕事すんのかな・・・」

「まあそれは次回ということで!」

「それじゃまたな」

大ボケのお仕事（前書き）

よしできたやっとなできた

大ボケのお仕事

はいこんにちは〜作者デース！

マリオくんはいつたいたいどうなるんだろうか・・・

第3話、はっじまっるよ〜

「まてー！ー！クッパー！」

「待ったないよーーだ！」

前回クッパはクッパクラウンに乗って先に行っていた

「クッパ！前！前！」

「へ？」

そこには壁があって勢い余って・・・

どっつつつつかつつっつしゃああああん

「ぎゃあああああああああ」

「自業自得だな・・・」

「全くですね・・・」

「まってよ！あんた達！主人である私をおいていくなんてどうゆう

つもり！」

「へ？主人って？」

「あんたねえ・・・あたしがあんたを契約したらそこであたしが主人なわけ！わかった！」

「なるほど！すっかり忘れてた」

「すっかりって・・・あんたねえ」

「マリオさんはそうゆう人なんですよルイズさん」

「そうゆう人って・・・はぁ疲れた・・・すまないけどヨッシー、背中に乗せてくれない？」

「いいですよ」

「ありがと・・・」

「で？この建物はなんだ？」

「ここは、トリステイン魔法学院というの」

「トリステイン？」

「トリステイン魔法学院は、このトリステイン王国の名前をとっているの」

「なるほど・・・聞いたことがない国だな・・・」

「なんであんた達がこの国のことを知らないのよ・・・」

「だって俺たちはキノコ王国からきたんだもん」

「キノコ王国？なにそれ・・・？」

ルイズ達はお互い知らない国の名前を聞いて悩んだ

「うーん・・・どうやら俺たちは別の世界に来ちゃったみたいだな・

・・・」

「ふーん・・・ま・いいや早く部屋に行くわよ」

「あ・ああわかった」

「はへーすっごい所だなー」

「あたり前でしょここはとっても有名な学院だもの」

「へたしたらクッパの城よりもでかいかもしれないね」

「わしの城の方がでっかいもんねー！」

「おいおい・・・負け惜しみを言うなよ・・・こっちの方が迷うわ

「ついたわ、ここが私の部屋」

「おおーすっごいなー」

マリオ達は部屋を見て感心した

「はあー今日は疲れた・・・寝る」

「おいおいいきなり寝る・・・て・おい何してるんだよ！」

「なについて服脱いでるだけだけど・・・」

「いやおかしいだろ！」

「なによ、使い魔の前なら恥ずかしくないわ」

「こっちが恥ずかしいわ！」

「ま・私は寝るから、あと服洗つといてね」

「俺たちの寝るとこは？」

「あんた達はソファーとかそういうとこでいいの」

「おまえな」

「ま・野宿じゃなくてよかったじゃねえか」

「そうですよ今まで冒険の途中何回も野宿続きでしたし」

「それもそうだな」

「わしはこの甲羅の中でねるわ」

「あーわかったわかった」

「じゃお休み」

「おやすみなさいマリオさん」

そしてマリオ達は眠りにはいった

「いやゝよく寝たわ」

「・・・ほかの奴らも寝ているし・・・あ！そうだ洗濯物しねーとな」

マリオはルイズが脱いだ服をもって洗濯しに行った

「・・・・・・」

「わーーーーーーー！迷ってしまったーーーーー！」

予想的中だなw見てのとうりマリオは迷ってしまった

「いったいどこだよここ・・・」

「あ・あのー」

「ん？」

メイド服を着た女性がマリオがに話しかけた

「洗濯しにいくのでしょうか？」

「あ・ああそうだけど迷っちゃった」

「それならいっしょに行きましょうか」

「お・いいのか！あんがとな！」

「マリオさんはルイズさんの使い魔ですよね」

「ああそうだよ」

「私の名前はシエスタっていいですよよろしくお願いします」

「おう！」

「後もう少して洗濯場につきますからね」

「わかった」

「へえ洗濯はこんなに昔のような仕方ですわんだ」

「マリオさんのいた所では洗濯物をどんなふうに洗っているんですか？」

「俺たちがいた世界ではな、洗濯機という便利な機械で洗ってるんだ」

「へーすごいんですね」

「へへ・まあな・・・おしこれでいいだろ」

「じゃあルイズさんの部屋まで案内しますよ」

「お！本当かありがとな」

「シエスタありがとな」

「はい」

シエスタは笑顔で答えると向こうに向いていった
「よしそれじゃあ・・・」

スウウウウウ

「起きろおおおおおおおーーーーー」
どかあああしやああああああん

ルイズの部屋にいた人全員ずっこけた

「びっくりしたなあもう・・・」

「いきなり大声出さないでください」

「わりいわりい」

「な・なに・・・？あんただれ・・・？」

「俺だよマリオだよ」

「ああ昨日召喚した使い魔だったわね」

「そうだよ」

「たく・・・もっとましな起こし方してくれる？」

「そうだな」

「・・・よし着替えたから朝ご飯食べに行くわよ」

「わたしはいいですよ」

「え！？ヨッシーが食べないとは珍しいな」

「だってわたし、クリボーのほし肉がありますから」

「・・・おいしいの」

ルイズが興味心身で聞いてみた

「わああああ！いいから、いいから早く食べに行こうぜ！」

「・・・おいしそう・・・」

ルイズがぼそりとそういった

大ボケのお仕事（後書き）

ふ・・・おわった「終わったじゃねーよ！なにしてんだよ！」
なにつてこーゆうオチもいかなーと思って

「いいわけねえだろ・・・」

まそれはさておき次回予告なんDZE☆

「さーてと次は食事と・・・えーと何だっけ？」

次回！『使い魔と食事と勉強と』です！

「またみてくれよ」

使い魔と食事と勉強と（前書き）

コメを見てニヤニヤする作者・・・いやらしい・・・

使い魔と食事と勉強と

はい！作者デース！

いつものようにマリオをボケさせマース！

「全く・・・ルイズ・・・おめえなあ・・・」

前回ヨッシーが出したクリボーのほし肉がおいしそうと思ったルイズであった

「な・何よ！おいしそうだったのよ！」

「どんな目のつけ方してるんだよ・・・」

「まあまあ・・・お！ついたみたいだぞマリオ」

「うお！すっごく広いんだな」

「当たり前でしょ！貴族だけが入れる食堂なんだし・・・」

「・・・へ？貴族って・・・」

「な・何よ・・・」

「お前・・・貴族なのか・・・！？」

「そうよ！言ってなかったっけ？」

「はへ！すごい昔のどこに来ちまったんだな・・・」

「なにいつてるの？早く朝食食べに行くわよ」

「わかったわかった」

「え！？これが俺たちの食事！？」

「そうよなんか文句ある？」

「ありまくりじゃー！ー！」

「まあないよりはマシか」

「マリオ・・・それでいいのか・・・」

「ま・冒険するには栄養さえありゃ十分さ！」

「きつと後悔するぞ・・・」

「大丈夫だって！平気平気！」

「マリオ、ついてきて授業受けるから」

「全く・・・ま・いいか」

仕方がなくマリオはルイズについて行った

「おなかすきました」

その声の主はヨッシーであった

「やっぱクリボーのほし肉だけじゃおなかは満たされません・・・」

「あ・あの」

「ん？なんですか？」

「ルイズさんの使い魔ですよね」

「そうですよ」

「おなかすいているんですならこちらにどうぞ」

「あ・・・はい」

「うつひよ～～～これぜ～んぶ食べていいんですか!？」

「はい、マルトーさんも喜んでOKしてくれましたし」

「ふふふ・・・この私の手に掛かればこんな物ちよちよいと作っちゃいますぞ!」

「じゃ・・・いったっだっきまーす!」

「ふ～食べた食べた」

「すんごーいくいっぷり! 気にいりましたぞ!」

「すごいですね・・・ヨッシーさん・・・」

「いやあ～こんなにいっぱい食べたのは久しぶりですよ」

「もしよかったらまたこいよ! 今度は倍の量を作ってやるからな!」

「ほんとですか! ありがとうございます」

その頃・・・

「いやあ～それにしてもよく迷わないんだな」

「ま・あんたもここに長くいれば迷わないですむわよ」

「なるほどな」

「あ！」

「ん？」

「あら、ルイズじゃなくい」

「キュルケ・・・たく・・・何なのよ」

「ルイズの使い魔を改めてみたいと思ってね」

「え？おれ？」

「そ・あんた、いい体つきしてるんじゃない？」

「キュルケ！何かってに人の使い魔に手を出してるのよ！」

「おい炎を身にまとったトカゲがいるぞ！」

「ああこの子はフレイムというのよろしくね」

「キュル！」

「ふん！あんたの使い魔なんかちつともうらやましくないもんねーだ！」

「ふふふ負け惜しみを言っても無駄よ」

「あの」

「ん？なによマリオ？」

「話している途中悪いんだが・・・授業に間に合わなくなっちゃうぞ・・・」

「あ！忘れてた！」

「おいしいいい！早くいくぞおおお！」

「わかったわよおおお！」

「ふふふ・・・面白い使い魔ね」

「セ・セーフなのか？」

「どうやら・・・そうみたい・・・」

「はい皆さん席について」

「おい、あれがルイズの使い魔みたいだぞ」

「おい！ ルイズ！ 召喚できないからって平民連れてくんなよ！」

「あのさうおれはれつきとした使い魔だぞう」
いまはさうして

「はい！皆さんお静かに！」

「まったく……お前らの授業ってこんなに疲れるのか……」

「…あんたが特別なだけだと思う…」

「……聞いてますか？ ミス・ヴァリエール？」

「あ！はい！」

「じゃあこの石を錬金してみてください」

「へ？…あ！はい！やってみます！」

「ちよ！やめといたほうがいいと思うぞ！」

「爆発だー！爆発するー！」

「へ？なにやってるんだ？」

「…使い魔君…危ない…」

水色の髪のした女の子がいった

「へ？なにをいって…」

ドッ
カー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ン
！！！！

「わあああああ！」

「ごめんごめん失敗しちゃったW」

「失敗しちゃったWじゃねええええええええええ！」

「ほらみろ、また爆発した！」

「たくよお……死ぬかと思つたぜ……」

「ははははは・・・」

「…予想どおり…」

「で…なんで俺まで掃除しねーといけねえんだよ!」

「仕方ないじゃん、あんたは私の使い魔なんだから」

「…確かに…」

「…ねえマリオ…」

「ん?なんだ?」

「やっぱり私のことゼロとか思っている?」

「は?なにいつてるんだよ、あれでもすっごかったぞ!」

「…ほんと?」

「ああ!」

「…ありがと(ぼそ…」

「ん?なんかいったか?」

「あ!いやなんでもない!」

「やっと終わった」

「ふうありがとマリオ」

「まあな、そうだとっかぶらついてもいいか?」

「いいけど…迷わないでよね…」

「大丈夫だって…なんか地図ない?」

「…もう…」

「へーここが図書館かーさすがに広いな」

「ん？タバサじゃない！おい！」

「・・・あ・・・ルイズ」

「あれ君って確か・・・あんとき忠告したやつじゃないか？」

「あ・・・使い魔君・・・」

「使い魔君じゃなくてマリオだよ」

「え？マリモ・・・？」

「そうそう海に出たらそくゲームオーバーのやつ・・・て！ちげえよマリオだよ！」

「・・・ごめん・・・」

「たくよお・・・そういえばおなか減ってるんだった・・・」

「あんたねえ・・・栄養が大事って言ったには早すぎると思うんだけど・・・」

「うるさい！・・・ん、お！あそこにサンドイッチがある！」

「あ・・・それは・・・」

「いっただっきまーす！」

ぽく

「・・・からあああああああ！！！！！！」

「だからいったのに・・・」

「なんのサンドイッチだったの・・・」

「ハシバミのサンドイッチ」

「うわあ・・・そりゃあゝなるわけだわ・・・」

あいからわず口から炎を出しているマリオであった

「ひいゝひいゝ水ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ！！！！！！」

使い魔と食事と勉強と（後書き）

作者と！「マリオの！」

次回予告！

「作者：何で俺だけがこんなにひでえ目にあうんだよ・・・」
え？だってボケやくはお前だろ

「ほかにもいるだろほかにも！」

まあまあさて次回は！

「へんなギザやろうにおとした香水を渡したらシエスタにゲギ怒！
そんなやつは許さない！」

次回！『VSギーシュ！青銅はどんな形でも青銅だ！』です
「次回もみろよ！」

V S ギーシュ！青銅はどんな形でも青銅だ！（前書き）

よし！やっとバトルに入った！

V S ギーシュ！青銅はどんな形でも青銅だ！

ポケバトルです！そう！ポケバトルが開催されるのデス！

「ひーあんなサンドイッチ食べるんじゃなかった・・・」

前回ハシバミのサンドイッチを食べてしまい口から火を出したマリ
オくんであった

「あんたが悪いんでしょ・・・」

「だってよお・・・おなががすいたんだもん・・・」

「・・・はあ」

食堂にて

「昼めしだー！」

「・・・あれ？マリオは？」

「さあ・・・トイレでも行ったんじゃない？」

「おいルイズ・・・あれ・・・」

それを見たルイズとクッパはずっこけた

「はいゝスイーツだよゝおいしいおいしいスイーツですよゝ」

「おいゝゝゝゝゝ！ヨッシー何やってるんだよゝゝゝゝ！」

そう、そこにいたのは、スイーツをもったヨッシーであった

「なについてスイーツを配ってるんですよ」

「おいおい・・・なんでそんな急に・・・」

「マルトーさんがこのスイーツを配ってきてくれって言いましたから」

「マルトーって？」

「この食事を作っているシェフよ」

「はへゝスゲーな」

「はい！マルトーさんの料理、おいしいですよゝ」

「マジか！」

「ま、私達貴族が認める料理なんだしおいしいに決まってるじゃない」

「ふゝん」

「おゝい！」

「あ！マリオさん！」

「いやあゝ最後の踏ん張りが強敵だったよ・・・」

「いうなゝゝゝゝ！」

「おいギーシュ！お前誰と付きあってんだよ！」

「ふ、付き合うこのボクに付き合う女はない、バラだけがボクの友達なのさ」

「ん？あいつなんか落としたぞ？」

「香水みたいですな・・・」

「おゝいお前この香水落としただろー！」

「ん？それはボクのじゃないけど・・・」

「へ？だってお前のポケットから落としたの見たぞ？」

「ああ・・・それは・・・」

「ん？どした？」

「あ・ああこれはボクが預かっておくからね、さ・きみはいつたつた」

「・・・ま・そうだな」

マリオはギーシュのもとを離れた

「ふうだれも見えてないな・・・よかつた」

「誰がこの香水の持ち主はいませんかーーーーー」

どどどどーーーーー！

ギーシュは派手にずっこけた

「な・なんであいつが香水もってんだ・・・」

「なんだなんだ」

「どしたどした」

「あ！それは私の作った香水！」

「へ？そうなの？」

「うわああああ！！！！・・・は！」

「・・・嘘・・・」

「は！ケティ！これは・・・」

「ギーシュ様・・・それは・・・」

「ん？なんか書いてある・・・モンモランシー？」

「・・・！」

「あ！ケティ！待ってくれ！これは誤解なんだ！」

ケティは泣き出しながら去っていった

「あーあ・・・いっちゃった」

「・・・」

「あ・あのーそれってモンモランシーの香水じゃないのですか？」
「・・・シエスタ・・・」

「はい？」

「お前のせいで！二人の女性が傷ついたじゃないか――！――！」

「ええええええええええ！」

「お前なあ、八つ当たりやめないか……」

「うるさい！ゼロのルイズの使い魔に召喚された平民のくせに！礼儀を知らないのか！」

「私の名は！正義のヒーロー！」

「ちっがーっう！正義じゃなくて！礼儀だ！」

「あ・そっちなね・・・」

「く・どうやら君は貴族への礼儀を知らないようだね・・・」

「^?」

「平民！お前に決闘を申し込む！」

[illegible]

「広場に来い！そこで決闘を開始する！」

「なんか大変なことになっちゃったみたいだな・・・」

「マ・マリオさん……殺されちゃう……」

「^?」

「貴族を怒らしたら・・・」

そう言いシエスタは泣きながら去っていった

「へ？へ？な・何だよ・・・・？」

「あんた何してるの！」

「へ？ なるって・・・」

「平民がメイジに勝てないっていうの覚えてないの！」

「あゝ確かそう言っていたな・・・」

「言っていたなって……まさかあんた本気にいくの……」

「ん？ ああ決闘ね……ふこのマリオが負けるとでも思うの」

「うん」

「・・・いいいいさ・・・（いいいい）」

「あ・ごめんごめん、でも平民はメイジには勝てないのは普通なのよ、常識なの！」

「・・・なるほど・・・」

「わかったのなら謝ってきなさい！」

「えゝめんどくさいゝ」

「めんどくさいって・・・あんたね・・・とにかく平民はメイジには勝てない！わかった！」

「あのゝマリオさんならとっくに行きましたけど・・・」
どどどー！

ルイズは派手にずっこけた

「諸君！決闘だ！」

「決闘だってよ・・・」

「誰と相手するんだろ・・・」

「ルイズの使い魔だってよ・・・」

「うおっはwwww完全にギーシュの圧倒じゃんwwww」

「いまからゼロのルイズの使い魔を綺麗につぶしてあげると約束しよう！」

「待たせたな！」

「お！来たな・・・てなんだその格好は！」

そこにいたのはバレリーナのアヒルをつけて（股間に）ズボンを頭につけて・・・なんて言うかぐっしやぐっしやのマリオがいた

広場にいた生徒達は全員ずつこけた

「かかってこーい！」

「まてまてまてー！なんだその格好は！」

「あ……すまんすまん」

「たく・・・今から綺麗につぶしてあげようというのに・・・あきれかえってしまおうわ！」

「よし！今度こそいくぞ！」

「ふ・掛かってこい！ワルキューレ！」

そう言いバラをふつたらワルキューレという人形を出した

「お？なんだこりゃあ」

「これは青銅で作った人形『ワルキューレ』だ！」

「ほう青銅か……いくぞ！」

マリオがパンチをくりだしワルキューレにヒット・・・

「いっへ~~~~~!」

「当たり前だ！青銅がパンチごときに壊れるとでも思ったか！」

「だまらっしやい！」

「さあ次はこっちから行くぞ！ワルキューレ！」

「く！じゃあパンチがだめならこれでどうだ！」

そう言いマリオはどこからともなくハンマーを取り出しワルキューレを殴った

ごん!

という音が出るとともにワルキューレは粉碎された

「ほうなかなかやるじゃないか、ワルキューレ！」

「ひゝ今度は7体かよゝ」

「ボクが操れるワルキューレの数は8体までだ！」

「な！本気かよ！」

「ふ・ぼくは君を平民だと思って油断してたが、本気を出さないと」

倒せないと思ったんでね」

「くそ」

「いけ！ワルキューレ！」

「おりゃー！やけくそじゃー！ー！」

「マリオさん！」

「おい！戦っているみてえだぞ！」

「え！？マリオ！」

「マリオキッソーク！」

「マリオチョーロープ！」

「おおマリオが優先してるみたいだぞ！」

「ひえ」

「と思ったら負けてんじゃねーかー！ー！」

「ギーシュ！決闘は禁止なのよ！」

「おや、ルイズ、それはメイジ同士だけじゃないか使い魔との決闘
はいいんじゃないのか？」

「く・・・」

「いったいどうすればいいんだ・・・」

「終わりだ！ワルキューレ！」
バキィ！

「のわぁー！ー！ー！」

「ふはははは！みたか！メイジの力を！」

「マリオー！ー！ー！ー！」

ルイズは泣きながら言った

「フフフ・・・」

「ん？なにがおかしい？」

「倒れた所にこれがあったんだけど・・・」

「あ！それはニンジンじゃないですか！」

「ニンジンを持ってどうするんだ？」

「それは今から始まるんだよ！」

ぼわん！

「！？」

「な・・・何が起きてるのよ・・・」

「マリオ！元気だった〜」

「へ？」

「「「にんじんがしゃべったーーーーー！！！！」」」

「ニンジンさんじゃないですか！」

「おいおい・・・みてわからねえのか・・・」

「あ・ごめんごめん・・・」

「く！ニンジンがしゃべった所でお前の勝利はないんだよ！」

「にんちゃん！変身させてくれ！」

「わかったよ！マリオ！」

ぼわわ〜ん

「バニーマリオ！見参！」

「う・ウサ耳がはえた・・・？」

「よーしいつくぞー！」

そのときマリオのルーンが光った

「必殺！ウサ耳旋風拳！」

ばきばきばきばきばきい！

「な・なに〜〜〜！」

「どうした！この程度か！」

「ひ・ひい！ごめんなさい！負けを認めるから見逃して〜〜〜〜〜
！」

「それなら条件がある！まず一つ！ルイズをバカにしたことを謝れ
！二つ！シエスタに八つ当たりしたことを謝れ！そして男なら正々

堂々とするんじゃ！」

「わ！わかりましたー！ー！ー！」

といいギーシュは泣きながら行ってしまった

「ふう疲れた〜」

「マリオー！」

「わ！ルイズ！」

「もう！心配したんだから！二度とこんな無茶なことしねいでね！」

「あくわかったから泣くのをやめろよ・・・」

それから泣き止んだのは1時間後であった・・・

V S ギーシュ！青銅はどんな形でも青銅だ！（後書き）

作者と！「マリオの！」

次回予告！

「たぐよおゝ今日は疲れたぜ・・・」

こっちの体力の方が疲れたよ・・・

「作者ご苦労さん」

さて次回は！

「いやあゝ校長先生に呼ばれちゃった・・・なんか悪いことでもしちゃったのかな・・・」

次回！『ルーンの秘密としやべる剣と大泥棒！？』です！

「次回も見ろよ」

ルーンの秘密としやべる剣と大泥棒! ? 前編 『ルーンの秘密編』 (前書き)

ふふふ・・・初めての前編&中盤&後編に分けた・・・

ルーンの秘密としゃべる剣と大泥棒!?! 前編 [ルーンの秘密編]

Q マリオに剣は必要ですか？

A それがないと物語が進まない

「いやゝ疲れたなゝ」

前回ギーシュとの決闘に勝ったマリオであった

「おつかれさんマリオ」

「しかし・・・何でニンちゃんがここにいるんだ？」

「ぼくが昼寝しているとき、突然鏡が現れてここに来たんだ」

「ふうん・・・あ！じゃあここにも俺たちの世界にいるやつらがここに来ちゃったのかも！」

「そうかもしれないね」

「よし！そうと決まればたんさ「マリオさーーーーんーーーーー」

「！」へ？」

「マリオさん！大丈夫でしたか!？」

「わあ！シエスタじゃないか！いったいどうした!」

「じつはギーシュさんが私の所に来て謝ったのです!」

「ああそりゃあ俺が勝ったからな」

「え! 本当ですか!？」

「ああホントホント」

「ボクを忘れないでよマリオ!」

「ああすまないすまない」

「その方は?」

「ぼくはニンジンっていうんだよ」

「私はシエスタって言います」

「ニンちゃんは俺たちの世界にいたアイテムなんだよ」

「そ・ほかにもたくさんアイテムがあるんだ」

「へへ」

「マリオー!」

マリオは声のした方に顔を向けるとルイズが走ってきた

「ん? どうしたルイズ?」

「もう、どこにいったのよ!」

「ああわりいわりい、ちょっとぶらついてて・・・」

「まったく・・・オールド・オスマンがマリオを呼んでこいっていわれて・・・探したのよ!」

「え? ワールド・ネスマン?」

「ちゃうわ! オールド・オスマンよ!」

「で・そのルイズはそのノールド・ノスマンに呼んでこいって言われたんだな、で、部屋はどこだ?」

「だ・か・らオールド・オスマンって言ってんでしょーが! たく・オールド・オスマンは学院長室にいるわ」

「へ? 学園長室」

ルイズはど派手にずっこけた

「学院長室よ! 学院長室!」

「あ・なるほど」

「なるほどって・・・あんだね・・・」

「まあ仕方ないよマリオは元からこうなんだから・・・」
「ニンちゃん・・・それはどういうことだよ・・・」
「そのまんまのとうりね・・・」
「いったいどうゆうことなんだよおおおお!!!!」
などとコントをしつつルイズはマリオをつれていった。
「・・・は!まさか・・・私って空気・・・」
そう思い込むシエスタでした

ひげ親父移動中・・・
「ひげ親父言うな!!!!」

「オールド・オスマン、マリオを連れてきました」
「うむ、よく来たねマリオ君」
「あんたがオールド・オスマンか」
「ああそうだよ、きみの活躍はすごかったね」
「ニンちゃんのおかげさ」
「? ニンちゃんとは?」
「こいつさ」
「ほう・・・おっきなニンジンですな」
「そう? おたくもおひとついがが?」
「これはこれは、おいしそうなニンジンですな」
「やめーーーーー!!!!!!」

「わりいわりいノリだよノリ」

「どうゆうノリだよ！」

「まあ、マリオ君はニンジンをとった瞬間ウサ耳がはえたがそれは
いい・・・・」

「どっから見ただんだよ・・・・まあ俺たちの世界じゃニンちゃんみ
たいなアイテムがあつてそれをとるといろんな姿に変身するんだ」

「ほう、それはおもしろい、それで、君たちの世界といったねそれ
はどうゆう所だい？」

「ああ俺たちの世界か・・・・まあ簡単に言えばのんびり豊かな世界
だな、あとそれにキノコが名物で、あと名前はキノコ王国っていう
所だな」

「ふむ聞いたことのない所ですな」

「どうやら俺べつの世界に來ちまったみたいなんだ」

「ふむ・・・・君にとってはここは別世界で・・・・私達にとっては君
の世界は聞いたことのない・・・・なるほど興味深いですな」

「ま・ここもなかなかいい世界みたいだしな」

「それを言っただけとうれいすな」

「後それと、なんかルーンが光ったけどこれ何？」

「それはガンダールヴという珍しいルーンですな」

「ガンダールヴ？なんじゃそりゃ？」

「伝説の使い魔と言う意味じゃ」

「へー伝説ね・・・・まじ？」

「まじですな」

「ははははは！このマリオは違う世界でも伝説と言われるほどの人
気をもっているようだな！」

「ごめん、そっちじゃない」

「あら」

ドドッ！

マリオはずっこけた

「じゃあ何の伝説だよ・・・・」

「このルーンは、不思議な力をもっていてね、それがあるいろいろな道具や兵器を操れることができる」

「ふ〜ん」

「じゃ・じゃあ！あるときルーンが光ったのって・・・」

「そう、マリオク君がニンジン君を使って変身したとき、それに応用してルーンの力が発動した」

「ほう、それじゃあ他のアイテムでもそうゆうのが起きるかもな」

「まあ、私が言いたいのはそれだけだ、もう下がっても良いぞ」

「はい、じゃあ行きましょう、マリオ」

「おお！」

「おお我らが赤い男が来たぞ！」

「・・・なあルイズ・・・」

「何よ・・・」

「いつからおれ『我らが赤い男』ってよばれるようになったんだ・・」

「さあ・・・」

「おお我らが赤い男！前の戦いはすごかったぞ！」

「あああんときのか・・・」

「さすが我らが赤い男だ！」

「へへまあな」

「さすが我らが赤い男！俺たちにできないことを平然とやってのける！そこにしびれる！あこがれるう！」

「えっへん」

「マリオいくよ・・・」

「あ・すまねえすまねえ」

「いやゝゝゝ今回は疲れたゝゝゝ」

「お疲れ様ですマリオさん」

「へん！ あんなどこでやられちゃ困るしよ、マリオはこのわしがた
おすんだからよ！」

「そういつて何回も倒されるやつは誰でしょう^^」

「だまらっしゃい！」

「まあまあ・・・マリオさんが勝っただけでも喜びましょうよ」

「あんた達・・・もう寝るわよ・・・」

「」「はあい^^」「」「」

こうして一日は終了した

ルーンの秘密としゃべる剣と大泥棒!？前編 『ルーンの秘密編』 (後書き)

作者と

「マリオの」

次回予告!

「全く作者・・・最近遅いじゃないの・・・」

リアルティで忙しいんでね・・・

「ま・気長にすればいいよ」

さて次回は!

「ルイズが武器をかうっていったきたどんな武器なんだろう?」

次回『ルーンの秘密としゃべる剣と大泥棒!？中編』(しゃべる剣編)

「次回も見ろよ」

ルーンの秘密としゃべる剣と大泥棒!?! 中編 しゃべる剣編 (前書き)

ポケるぜく超ポケるぜく・・・フヒヒw

「へー馬で移動するのか」

「そうよ、なんか文句ある？」

「いや、なにもないけど・・・」

「わしはクツパクラウンでいくか」

「でもあのとき壊れちゃったんじゃ・・・」

「あ」

「おいおい・・・」

「ま・まあ馬でもいいぞ、がはははは！」

「でもおまえみたいなやつに耐えられる馬なんて・・・」

「え？ いるけど」

「はい？」

「おおこれはすごい！ この馬ならのれるぞ！」

それはでかい馬だった

「よかったなクツパ」

「それじゃ行こうぜ！」

「おお」

「へえ、ここがシルフィードか」
「そうよ、ここはトリステイン一の都なのだから」
「…あれ？クツパは？」
「？　そういえばどこにもいねえな…」
「まあ勝手に戻ってくるでしょういいんじゃないでしょうか」
「ま・そうだな」

「な・なあこんなところに武器屋があるのかよ…」
「そうよ、さ・ついたわ」
「ほんとだ」
「まあ入ってみようぜ」
「へいらっしやい！」
「ほおいろんなもんがあるんだな」
「…？　まさか…あんた貴族さんじゃないのか？」
「ええそうよ」
「ほお貴族なのに武器を買うのかい」
「ちがうわ、私の使い魔に武器を持たせるの」
「そうかい、ま、ほしいもんがあるのならおれに話しな」
「お！　これはすげえな」
「けっ！　やめとけ！　やめとけ！　そんな剣鉄の塊で使いもんじゃねえよ！」
「へ？」
「こら！　デフルリンガー！　おまえはだまってろ！」
「え？　それってインテリジェンス・ソードじゃない？」

「なんじゃそりゃ？」

「いわゆる：魔法の剣かな？」

「よし！買う！」

「へ？だけどそれボロボロなんじゃない？」

「研げば使える！」

「おいおい：て！お前使い手じゃねえのか！」

「へ？なにそれ？」

「使い手っていうのは………」

「おいまさか忘れたっていうんじゃ……」

「いっけね完全に忘れてたwww」

「あら………！」

マリオはずっこけた

「ま：まあ面白そうだしいいか」

「：マリオが いいの なら いいけど： やすいの？」

「おお！厄病はらいにもなるからな！新金貨10枚でいいぜ！」

「え！まじ、安！」

「じゃ、よろしくなデフルリンガー！」

「デルフでいいぜ！ただしお前のことを相棒って呼ぶがな！」

「おお！」

「ふう」

「マリオさんおかえりなさい」

「おおただいま」

「へー恐竜がいるんじゃないか」

「へ？」

「ここだよここ！」

「まさかその剣がしゃべってるのですか？」

「ああそうだよ」

「俺の名はデルフってんだあ！よろしくな！」

「どっかで聞いたような声ですね・・・」

「ほらあの江戸っ子じゅうたんだろ」

「あああれですか」

「？まあいいや、今後よろしくな！」

「はい、デルフさん」

「・・・」

「どうしたルイズ？」

「いや、クツパのやつが帰りが遅くてね・・・」

「もう帰ったんだろ」

「・・・ま、そうよね、帰りましょ」

「おお」

「あるえー？クツパ帰ってない・・・」

「いったいどうゆうことだ？」

「さあ・・・」

「明日探しましょうよ」

「そうだな」

ルーンの秘密としやべる剣と大泥棒!?! 中編 〔しやべる剣編〕 (後書き)

作者と! 「マリオの!」

次回予告!

「いやあゝまさかクッパがいなくなるなんてね」

まあ次回出すから大丈夫ですよ

「ま・そうだな」

さて次回は!

「まさかの宝部屋の壁の崩壊!?! 大怪盗に盗まれるとは!」

次回『ルーンの秘密としやべる剣と大泥棒!?! 後編 〔大怪盗編〕

「次回もみろよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3287u/>

ゼロのマリオくん

2011年11月16日02時58分発行